

# 飛驒の伝承民謡と風土習俗の考察

—— 飛驒調査報告 第二報 ——

大 谷 千 尋

## 序

民謡はその地に生きる民衆の共通的情緒のうたい上げである。いわはその土地を基盤に、そこに生きる上の一切の条件——地象・風物・政治・経済・文化・伝統等々——から受ける共通的生活・情感の歌謡的表現である。従つてその作者は個人ではなくして「なかま」であり「みんな」とあると言つてよい。もちろんある時ある者か生んだものにちかいないけれども、それか仲間の心にひひき合つて、みんなか自分たちのものとして共鳴し、自らの心の叫びとして歌うところとなつたものだけか生き残つて、いわゆる民衆のうたごえとして何時までも互の胸にひひき合うわけで、それが民謡の本質である。明治以後いわゆる「民謡作家」と呼ばれる特別な個人による「民謡」が作られるに至つたけれども、それは本来の民謡とは異質のものと考えねはなるまい。敢て言えはその作者か忘れられ、むしろその歌詞が民衆自体のものと感じられて、仲間同志の心の底から湧き出る息吹きとして共鳴せられるようになったら、それが本来の民謡として新生したと言つてよいかも知れない。

かくて「民謡」は「民衆」と共に生き、「民衆」と共に成長する。ある詞は入れかえられ、ある詞は忘れられることもあれば、これに代る詞がまた付加される場合もあるし、一つの歌が全く忘れ去られてしまう場合もある。そこに生きる人々の生き方につれて、そ

のうたも変り得るのである。しかしなからまた、人々の生活か変わったからとて直ちにそれまで歌われ来たものか急に亡ひてしまふものではない。伝統をなつかしみ、回想を樂しみ、往古を偲ぶ心のあるところ、歌いつかれて来た「民謡」は、それかその土地と先人との真実にふれていれはいるほと、いつまでも伝承され、後人の心の中に生きて行くのである。いまここに飛驒の伝承民謡を考察することによつて、その地の風土や習俗を探るよすかたらしめようとするのは、こうした前提に立つのである。

しかし、いま飛驒路に生きつすけている古来の民謡かとれだけあるか、そしてそのどれかとの地区に生きとの地区には亡ひているかを明らかにすることは容易でない。老若を問わす声を合せて歌われているものと、わずかに古老の間にのみ命脈を保っているもの等を明らかにすることは——もしそれかてきたら地域的に文化や生活の推移を知るよすかともなるうか——いっそう複雑な手順と作業とを要すること、今の私にはとうてい及はぬところである。したがつてここには若干の既刊文献を手かかりに、特に風土性の高いものと考えられるものいくつかを取り上げて、これに考察を加えることから着手してみようとするもので、もし多少とも更に実証を試みるよすかたらしめようとするものである。もっとも、民謡のもつ普遍的性格は、大観的に見れば人間性につらなり、日本民族性に根ざすと

ころのものともつながるから、ここに「飛驒の民謡」をとり上げて  
もそれは必ずしも飛驒にのみ固有のものの上り得ることにはならな  
いことを考えねばならぬ。この地と同様な地勢にあり、相通する歴  
史的背景や文化的制約をもつ地方があれば、ここに採択するうたと  
酷似のものがその地にもあるのが当然だからである。まして後出の  
「糸挽唄」にみる「唄か千ありや 九百九十九まで 色のまじらぬ  
唄はない」(山田、五二頁)の如きは民謡のもつ最も基本的にして一  
般的な性格をそのまま表わしているものだし、また同じく「おもし  
ろいで」の歌ではないが「仕事辛苦にみられまい」の如きも、民謡に  
おける労働歌的性格の本質にふれたものというべく、敢て飛驒に限  
るものでないことは勿論であるが、強いて言えはこの地にもまたか  
かるものがあるという意味において敢て拾った次第である。

## 本 論

(一) 焼畑のうた

○ 山か焼けるに たたぬか雉子よ

これかたたりよか 子をおいて

○ 山か焼けると 山鳥や逃ける

身ほとかわゆい ものはない

○ 麦や菜種は 三年かかる

麻はその年 土用に刈る

○ 思いこんだか おさそれほとね(に)

なぎの煙さ よれるよさ

飛驒における郷土研究雑誌「ひだひと」の、皇紀二千六百年記念  
特大号として、昭和十五年に飛驒考古土俗学会から刊行された「飛  
驒の歌謡と民俗」と題する特集号に見えるもので、焼畑仕(なぎし

一) 風景として載せている歌である。(この筆者は山田白馬という郷  
土研究家。これが発行された時期の関係もあってふせ字の多い部分  
もあり、あて字や誤字と思われるものも可なりであるか、今回私が  
とり上げた民謡は本誌によるものが多い。以下出典を示すに(白馬)  
とあるのはすべて本誌を示す。なお明らかに誤字と見られるものを  
はじめ、仮名づかい等も改めたものがあることをこわっておく。)  
農地に恵まれない山地のひとつか土によって生きるためには、  
農地の開墾からはじめねばならぬことは昔も今もかわりない。現在、  
一つの大きい社会問題になっている「開拓農地」とそこに住みつき  
兼ねている人達の問題など思い合わせる時に、山ひだの間に生きつ  
いて来たこの地の人々の生活かしみみわかるような気がする。焼  
畑仕事(これを「なぎし」といっている。柴などをなぎ払って焼くこ  
ころからいうもの)——は必ずしも飛驒に限るものではないか、秋  
冬の間から——あるいは春の雪とけを待って柴草を刈り、これに  
火をかけて農耕の場を作ると共に、その焼灰を肥料として生かそう  
とするもので、そこに作られるものは大豆や「そは」「あわ」「ひえ」  
の如き食料か、「あさ」などであった。もちろん十分な収穫か上げ  
られる筈はないか、この焼畑によって、一年二年は殆んど施肥をし  
なくてもある程度のみりを得たもののように、その地力か尽き  
ればまた別の地を選んで焼くということも多かったという。既墾の  
農地外に——税の関係もあつたかと考えられる——次々と開拓の場  
を移して、どれだけかても余分の利得を上げようとすることもあつ  
ただろうし、特にまた大家族制の生活をする場にあつては、いわゆ  
る「おじ」(次男以下の男子)たちはその妻子を同じ家に迎えること  
をゆるされず、しかもその家の田畑はたらく限りでは自分の自由  
になる収入は全くなかったというから、ひそかに通り妻(これを「

夜妻」と呼んだらしいことが白ひき歌から想像される)や子を養うために「しんかい」畑を開く必要もあっただろう。「しんかい」は「へそくり」を意味する方言で、予定外の収入から私生児までこの一語に含まれているか、この語源は「新開の意か」と土田氏か推定している通りだろうと考えられる。

ともあれ、晩秋ともなるとあちこちの山裾からこの焼畑の煙が立ち上ったという。

万葉集東歌の「おもしろき野をはな焼きそ古草に、新草まじり生ひは生ふるかに」(三四五二)は、この歌だけでは何とも言えないけれども、「足柄の箱根の山に粟蒔きて、実とはなれるを逢はなくもあやし」(三三六四)とともに考え合わせるとやはりこうした焼畑作業に關係のあったものではないかと思われる。とすれば千二百年の昔に東国の農民かなめた労苦も、この飛驒人たちの労苦も同じものであっただろう。「麦や菜種は——のうたは、その焼畑に何を作るかの問題をうたったものであること明らかであるか、麻は蒔きつけたその年に早く収穫かできるから一番よいとはいふものの、それだけにその仕事の忙しさも急であつたようだし、食糧事情の關係もあつて何かと考えあぐんだもののように思われる。それに、益田郡小坂町誌には「雪の御嶽 七尾の裾に 麻を播いたか 生えたやら」の歌を伝えているから、麻に限らずこうした不安もあつたにちかいない。

なお、飛驒の回壇踊のうた(白馬八八頁所収)というのに「物を知らねは歌聞けおなご、歌は世間の理をつめる」というのがあるか、「山か焼けるに——」や「山か焼けると——」の歌はまさに「焼野のきぎす」の親心や人間のエゴイズムを見事にうたい上げたものとも言えるだろう。山裾のあちこちに舞い上る焼畑の煙は、一見

のとかな山郷の風景と見られることもあるうけれども、その実状を知るものの胸にはそこ知れぬ哀愁をかき立てたのかも知れない。

○ いせきないそや 柴掻き伐つて

麻は土用刈り なぎ仕へ

○ なぎの煙さ よれよれよれと

天によれゆく よれたかや (山田二八一—二九頁)

のような歌も見えている。「いせきない」は性急、せっかちをあらわす方言。尚前掲歌中「おさそれほとに」は「お前はそれほとに」の意である。

(二) 「わらひ根掘り」と「わらひ根たたき」

○ さこのぬくさに とんかを振れば

ふわりふわりと やわらかや

ドゥンショウ ドゥンショウ

アアホッテホッテ ホッテヨナア

ふわりふわりと やわらかに

ドゥンショウ ドゥンショウ

アアホッテ ホッテ ホッテヨナア

○ おらのはな畑 はな太るよに

拌みますそえ はなの神

ア、パンバコパンバコ

タンタコタンタコ

拌みますそえ はなの神

(ハヤシ詞 同前)

○ おらか初はな こまこて白て

岳の雪のよね 白いよね

ア、ペッターリペッターリ ペッターリコ

ネッチャリネッチャリ　ネッチャリコ

岳の雪のよね　白いよね

ねだんよいよね　ねはるよね

(ハヤシ詞　同前)

○ 里へひかれて　水籠にされて

もまれたたかれ　ままになる　—(白馬四四頁〜四五頁)

最初のうたは「わらひ根掘り歌」、次以下は「わらひ根たたき歌」として伝えられるものであるかあるいは両者相通じて歌われたものであろう。「わらひ」は「せんまい」と共に飛驒名産の一として市販されていること周知の通りであるか、それは春の若芽を採って、食用に供するものであり、もちろん古くから大切な食糧資源であった。しかしここにいう「わらひ根」は秋の頃に掘りとり、「てん粉」の材料とするものである。

さこのぬくさに——と歌い出しているから、事情を知らぬ者にはやはり春先の作業かと誤られ易いか、「わらひ根掘り」の最適期は旧暦八月頃だというから、正に秋の作業である。可なり寒くなる頃までその仕事はつすいたのであろうし、高地の山の秋はもはや肌寒さを覚える日が多い。そこから「さこのぬくさに——」かうたい出されているのである。「さこ」は山の浅い凹みになった場所や傾斜地を呼ぶ方言であるから、あたりの情景も想像できるか、そこで「とんか」(唐鍬)を打ち振りながら掘っている姿か「ふわり、ふわり」とやはやし詞からよく描き出されている。もともと自生のものを掘り採ったのであったか、前掲の焼畑作業によって地を肥やし、増収をはかることも行なわれて、その採取地を「はな畑」と呼んだ。「おらのはな畑——」の歌はこの間の消息を語るもので、よい「はな」(わらひ粉)を得られるように祈っているのである。

掘りとられた「わらひ根」はよく水洗いをし、たたきつぶしてからいくつかの精製過程を経て粉に仕上げられる。「水籠にされ」「もまれ」「たたかれ」の語かこれを示している。なお「——よね」は「——のように」の意で、良質の粉を得て高く売れるようにと願う心か率直にうたい上げられたもので、山地の生活のきひしさを思わせるのであるか、この「わらひ根掘り」は昨今ではあまり行なわれなくなったという。飛驒川(益田川)の上流朝日村あたりかわらひ根とりの代表的な地であったというか、良質の糊か機械的に量産される時代となつては、需要も減つて来たし、食糧事情も変つたのである。

### (三) 炭焼きの歌

○ 鳥も通わぬ　嶽山なれと

住めは都に　思われる

○ 都みやこと　だまくらかいて

とこか都じゃ　山はかり

○ 平湯峠の　炭焼く煙

とこのみすぎも　あたしやない　(白馬—四二頁)

山国の生活ときりはなせない「炭焼き」の歌を採って見た。この仕事も敢て飛驒独特のものではなく、凡そ山村と呼ばれるところなら、珍らしいものではなかった。私の郷里でもよく冬山の中腹からその煙か上るのを見かけたもので、さなから一幅の絵を見るように詩情をそそられる風景を描き出したものである。落葉しつくした雑木山に夕暮れ近く立ち上る煙を見て、子供心にもふと何か哀感めいたものを感じさせられた印象か今も忘れられないのだから、いわゆる「炭焼き」の労苦は想像にあまるものかあったにちかいない。「炭焼きかま」を山中に築く作業一つにも苦心が多いのだし、その近く

に設けた掘立小屋に寒い夜を過す苦勞など、恐らく当人以外にはわからぬものであろう。

炭材のつめ方も大事であったし、火入れをしてから焼き上げるまでのこつもむすかしいものだという。炭材と焼き上げの種類に応じた手順をまちかえたり、また「かま」の築きようかますかたりしたら、幾日かの勞苦と資材をふいにしかねないのだから、はた目に見る詩情豊かな眺めも、これを描き出しているひとひとにとっては精一ぱいの勞作そのものであった。この間の消息を語る歌を山田白馬の「飛驒の歌謡と民俗」に見ることかてきるので紹介したい。(一部、文字など改めたものがある)

○ 今年さはアえ——。初めて炭焼きならた。

一つ人目に樂なように見える。

二つ二たひこんな商売せまい。

三つ見んまにとこの炭おきる。

四つ斧(よき)の刃も研かねはきれぬ。

五ついつもかも油断かならぬ。

六つ無理焼き炭かこまこなる。

七つ立き立き釜木をよせる。

八つ焼いた炭ねだんか安い。

九つこの山材代たあこて。(注高くて)

十のところのもうけもないし。

盆の七月かんじよをしたら、

おちよの前掛買うかさえなあかつた。

さはアえ——。(四四頁)

釜木(炭材)の伐採とそれを釜場まで運ぶ勞苦や、火入れから焼き上げまでの苦心もこの中にうたいこめられているし、しかもこう

して焼いた炭もその材料代を差し引きするとあまり「もうけ」(利益)を上ける程には売れないかなしきさかよく出ている。冒頭に引用の「とこか都しゃ——」の不平もこうしたところから出たのだらうか。そもそも「住めは都」の諺は一面の真てはあつても、それ自体はるかな「都」へのあこかれを裏に秘めるところから出たもので、いわは哀しいあきらめの声ともいうべきものとすれば、この不満か口をついて出るのももつとも思われるし、「とこのみすぎ(生計)も樂じゃない」は、この間の事情をよく知るものの感慨である。

その勞苦のはけしさと、そして木炭の需給関係とから、炭焼き作業に従うものは次第に少なくなつたけれども、さすがに飛驒は今も良質炭の産地たる名に恥じない。まして旧幕時代には「運上物」として江戸に送られたものも多く、「すみおね」(炭負い)の行列か山坂を越えてなかなかとつつき、にぎやかに陣屋へくりこんだものだという。

(四) 田植のうた

○ 五月こわいよ 米の飯くれて

二百たす時や 目かむける

○ 五月こわいよ 夜から起きて

お日のはするを 待つわいな

○ 五月ひと月 立く子かほしや

立く子かすけて 寝てやすむ

○ おらか殿さの しんかい田じやに

三株一把に なるように

○ 大足踏みさも 一夜はこざれ

五月過ぎての 農休みに ——(白馬、二〇〜二二頁)

この一連の歌は「田植歌」に属するものである。山ひだの国にも

——いやそれだけに一そう——米作りは大切な仕事であったこと言うまでもない。大正五年刊行の「岐阜県益田郡誌」には「本郡（筆者注——当時は現大野郡朝日村及び高根村を含む）は田地狭隘なるがため、郡内の産米を以て需要を満たすを得ず。云々」（二二〇頁）と説き「優良品種の普及に努むると共に、一面には耕地整理を行い、田地の拡張を図り、米穀の増収に努めつつあり。」（二二二頁）としているか、北飛驒に入って高山市を含む盆地から、国府町、古川町へかけての一带か、現在では岐阜県における一穀倉地帯のように視られていることは注目しなければならぬ。また益田郡誌か「一反歩に付普通一石七八斗内外にして、多きは三石五斗以上に及ぶ所あり。」（二二四頁。圈点筆者）としているのは、当時における山間地帯としてはむしろ意外なまでの好成绩を上げていたと言つてよいだろう。殊に私か昭和三十年代の初め、古川町の一農家に下宿した当時聞き及んだところでは、良農は豊年ともあれは反収（凡そ一〇アール当りの収量）十二俵（凡そ七二〇kg）近くを得ており十俵（四石凡そ六〇kg）の収量は普通であるとのことであったが、その頃の私の郷里美濃の山間地帯では良田でも「反収八俵」か良農を意味していたことと思ひ合わせて一驚したのであった。多収の原因は飛驒農事試験場を中心とする高冷地向水稲の品種改良やその耕作改善の指導によるところが大きいだろうけれども、この地の農民の米作に対する執念とも言いたい程の精励ぶりともたらしたところを決して見のかせないものであって、稲刈りの終つたあとに見る赤土の小山——山から運んだ客土用の土——がまずその土壤改良への心意気を示し、別稿「たたかれ」（緑肥）刈りと共にこの田圃を肥沃ならしめて来たのであろうし、またその丹念な鋤き起しや掻きならしの上に、「大足ふみ」までして整える田植準備の入念さ等も見のかせない。

思う。

「大足ふみ」については別稿「おおあし」の所で述べたから重複をさけるか、その「大足踏みさ」（大足をふむ人）の労をねぎらおうとするのが前掲「大足ふみさも——」のうたである。ともあれ、ここ山の国の米作りは、その貴重な田圃にとりくむ人たちを、しゃにむに田植仕事にかり立てたにちかいない。「師走坊主に五月そうとめ（早乙女）」、これか村一番のもて役を意味したというが、一日をあらそう田植時にはこの田植女を大ぜいやとったものであったし、それも大いに優遇しなければならなかったことが最初の歌にうかわれる。

第二第三の歌はもちろん田植仕事の過重な労働苦を歌つたもので、他にも「腰の痛いはせまの長さ、四月五月の日の長さ」のようなものもある。が、「泣く子が欲しや。」の歌には農家の嫁の立ち場も想われて、あわれさえ感じさせられる。しかもこうした辛苦を重ねてとり入れた米も、その農民自身は十分に食うことができなかったにちかいない。大半を上納米として納めねばならなかったからである。

「殿はとうすみ（燈心） 百姓は油

しほり取られる 殿様に」（白馬一七）

は端的にその重税苦を想わせるものであるか、そうした税の対象からのがれたために、またあるものは大家族構成下に住む「おち」（次男以下の男子）たちかその妻子を養うために、こっそりと内々の田を作ることまで苦心したことが、しんがい田（へそくりの田）の歌にしのはれるのである。

(五) 猪追いの歌

○ 猪よう 猪ようて とうずくひきやるう

おらも引かれて とすかれたあ

パンバコパンパン

○とうすくひきやるなら

ちゃんからといと ひきやれ

下のたんほへ 猪か出る

(ハヤシ詞略)

○ししよう ししよりは ねむたのさかり

とろりした間に ひと谷なめられた

「飛驒のことは」(土田)には、「とーすき(名)山中の山畑で猪や鹿などのおとしに、川瀬によって板を鳴らす一種の鳴子。(四六六頁)とし、「かわとーすき」「みすはったり」を参考語として上げているかこの歌に見る「とうすく」は綱を引いて音を立てるものであろう。殴ることを「とすく、とうすく」と言うのもこれと語源を一つにするものだろうか。

せっかく突った作物を荒しに来る大敵は猪で、その被害は昨今でも山地ではま見るところであるから、番小屋でも作って、夜を徹して張り番をし、鳴子を引いたことも多かったものと考えられる。風間のはけしい労働に疲れた身にはたさえ眠いものを、ひとりて張番ともなれはついとろりと居眠って、その間にせっかくの作りをやられてしまうようなくやしさも味わったことであろう。

(六) 臼ひきの歌

「あき」(収穫)を終わっても農家は決して楽々と休むひまのないことは、いすこも同じであった。その忙しさの一つを「臼挽き歌」に見ることかてきる。もつとも臼挽きには臼挽き(臼の脱穀)と粉挽きとがあつて、臼挽きには土臼または木臼を用いたし、粉挽きには石臼を用いたのであるか、ここに採択したものは主に臼ひきの歌であ

る。ここ十数年来、脱穀機や臼磨機の発達と普及が著しく、よほと山間地方にまで及んで来たから、その臼挽きの情景を見ることは少なくなつたけれども、新しい機械臼磨になつてもこれを「とうすひき」と呼んでいる所が多いほと農家にとっては忘れ難い作業であつた上、臼にとりつけられた押木に何人かかとり着いて、力を合せて挽くので、お互に助け合いもしたし、歌をうたいながらの臼ひきは、収穫のよろこびをこめて——わけても若い男女の混り合いなと案外な楽しい雰囲気をかもし出すものでもあつた。

山田白馬収録になる臼挽歌だけでも略ぼ三十に近いものかあるし、その中には労働歌の本質にふれるような面白さをもつものか多いか、紙面の都合もあるのてその一部を紹介し、若干の所見を述べに止めたい。特に解説を要するものは少ないか、( ) 書きをしたものは私の註記である。

○ 臼の軽さは、根とりかまき

相手かわるな あすの夜も

(「根とり」は押木の舵取りである。語源は押木の根元を持つ

意か、あるいは音頭取りの「音取り」か?)

○ おらに逢いたきや 臼ひくそはへ

臼か重いかと いうてごされ

○ 臼の重さに お前を待った

臼の軽さよ うれしさよ

○ 臼の軽さよ 相手のよさよ

相手かわるな あすの夜も

○ 臼は大白 ねとりは殿さ

臼のまいよは こまのよな

(「臼のまわりようは こまのようだ」の意)

○ 臼を挽くうちや ひかせておいて  
臼かしまえりや ぼいまくれ

(臼ひきか終れば追い払えの意。女目あてに手伝いに来た男をでもあろうか。)

○ お寺まいらりよ 若いにゃやらん  
若うて先だつ 身じやないか

○ お寺まいるよりや 臼ひきなさりよ  
二升と三升ひきや 後生になる

(「五升」を「後生願い」にかけている。これは「粉ひき」をうたったもの)

○ 夜妻さまへの 身か冷えますぞ  
入って臼挽きや ぬくもなる。

(先に述べた「おち」の通い妻を「夜妻」と呼んだ。それが夫の臼ひき場をこっそり見に来たのへ呼びかけたものである。「ぬくもなる」は「温くもなる」である。)

○ くるりくるりと まう嫁ほしや  
臼のいわ臼 嫁にとれ (いわ臼上臼)

○ 風は田の草 野や畦の草  
よさ(夜)は六升の 麦をひくー(以上、白馬三一―三二頁)―

好いた同士の若い男女が一つの押木につかまって調子をそろえて働くことに何かほのぼのとした喜こひを感じ合ったことであろうし、「臼かしまえりや、ぼいまくれ」には明るい笑いを誘ったことであろう。あるいはその笑いのかけでそっとはにかむ娘姿もあっただろうと思はれる反面、農家の嫁の労苦のほどがこのうたにも偲ばれる。田植歌にもあったように、疲れたからとて気ままに身を休めるわけにはいかなかったのである。江馬三枝子著「飛驒の女たち」

(昭、一八、)の中に、「飛驒では縁談かまとまった時の嫁の親たちの口上は、『間に合わん者ですか、せっかくのお話であつらいます(おあすけます)で、よろしうお頼みます』というのが普通：』というように見えているか、嫁を迎えるということか家の労働力を得るということに大きい意味をもっていたことは農山村の常である。私の郷里でも、嫁を迎えた家の姑か、その嫁を伴って隣組を挨拶してまわる口上に「手間を借りましたのでよろしうお願いします。」というのかいたのはまだそんなに古いことではないし、飛驒では、嫁もらいのことを「手間もらい」と言ったり、「結納の品を」「手間じるし」と言ったりする地域のあるのみか、花嫁のことを単に「手間」と呼ぶところもあるという。(飛田のことは「参照」)

#### (七) 糸ひきの歌

飛驒の産業の大事な一部門に蚕糸業のあったことは忘れてならぬところであろう。益田郡誌(大正五年刊)には、「現今に於ては製糸戸数七三七、釜数一、六一三にして、生糸製造高五、八一四貫を算し、本郡重要物産中の第一位を占め、之か盛衰は直に郡経済を左右するの状況にあり。」(三三七頁)と説き、また郡内八カ町村(萩原町、小坂町、下呂村、竹原村、上原村、中原村、川西村、馬瀬村)に職工五人以上を使用する製糸工場として二五社の名を連ね、その工員数合計七二三(内、女六七五)を表示している外、製糸機械の種類や技術改善、生糸産額等をこまごまと記載して、一層の振興策を講ずべきことを論じているほどである。

もっとも最近小坂町の副議長から聞き得たところでは、この地の当時の製糸業は極めて規模も小さく、年間を通じて消化するだけの繭を他郷から買入れる資金もたぬため、土地で生産されるものだけを生糸にするに止まり、在繭高に依じて操業短縮——というより



もむしる休業するものか多かったのか実情で、したかつてここに働く「糸ひきさ」も季節労働者のというか、今のパートタイム式に出る婦女子が多かったのだという。そして小学校を卒えたばかりの女子か「糸ひきさ」としてむしる他郷に出稼ぎするものか非常に多く、嫁入り支度は糸ひきて自ら稼ぐのか常識の様になっていたため、敢て生活に困らぬ者の子女までか長い山路を越えて中津川方面から名古屋方面へ出かける情景はむしる哀れを感じさせられるものさえあったとのことである。しかも悪い労働条件下に身を病む者が続出して、そのためにこの山郷の地か全国一の結核病患者村という様相をさえ示すに至ったというから、女工哀史の物語は飛驒の各地に見られたのであった。「正月前ともなると桃割れに結った『糸ひきさ』たちか、着物の裾を高く折り上げ、赤い腰巻きに脚絆はき姿という揃いのかっこうで長い列をなして益田街道を帰って来るのか何日もつづいたものです。」とは萩原町の一老婦人か語ってくれたところでもある。

ともあれ、出稼ぎの「糸ひきさ」、土地の工場にはたらくそれの外に、自家の「座繰糸」をひく者など、飛驒の婦女て製糸業にしたかったものはまことに大きい比率を占めたにちかいかなく、それだけに「糸ひきうた」と呼ばれるものも特に多い。しかしさすかに若い婦女の歌である。その内容は殆んどいわゆる「いろ」にかかわる一般的なものか多く、必ずしも飛驒の風土色をうかかわせるものか満ちてはいないかその代り人情の機微や労働歌の本質にふれているものも見られるので若干を採録して見たい。

○ うたか千ありや 九百九十九まで

いろのまじらぬ うたはない

○ おもしろいての うたではないか

仕事辛苦に 見られまい

○ とのまに逢うとて 門まで行けは

とのさ奥の間て 学問なざる

呼ふにや呼はれす 手じゃ招かれず

はらりはらりと 小石を投げは

思いかけなさ 嵐か来たと

いうてとのまか 逢いに出る

まくらならべて やれうれしやと

思や蒸気の 笛か鳴る

○ 糸をとるよな 辛苦のことを

たれか教えた のや とのさ

○ 夏の糸ひきや 乞食のまねよ

かけたお腕に 箸そえて

○ 風間乞食て 夜さりは大名

おくら借り衆か つめかける

○ 歌はうたうても あて歌きらい

煙草すうても やにきらい

○ 髪もゆうまい お化粧もすまい

おもたお方と 添うじゃなし。 —(以上白馬五五(七七頁))

「おもたお方」は言うまでもなく「思うたお方、恋する人である。

万葉集巻九に見る播磨娘子の歌「君なくはなそ身よそはむくしげなる玉の小櫛も取らむとも念はず」(一七七七)を連想させられるものではないか。女心に千年のへたたりはない。

(六) 桑とりの歌

前掲の益田郡誌には桑採歌として次の四歌をあけている。

○ 桑をとりやるか おこがいよいか

若い糸挽き たのみやるか

〔「おこがい」は「お蚕飼い」。それか病蚕など出ないで順調に進められているか否かを問うのか「おこがいよいか」である。〕

○ 若い糸挽き 頼もかままよ

村の若衆の 世話にやせぬ

（ここの糸ひきを頼むのは恐らく自家製産のためと思われ  
る。）

○ 益田よいとこ 奥飛驒よりも

竹の林は そよそよと

○ 竹の林は そよつくけれど

まずて食わりよか 麦飯を （五四五―六頁）

奥飛驒とは分水嶺宮峠から北を呼ぶのであって、真竹などの大きい竹は生育していない。竹の林のそよつく風情をお国自慢にとり上げたのに対して「麦飯」をもち出したのは、益田地方が特に麦の多産地であったからで、奥飛驒か積雪量の多い上に、湿田一毛作の地が多いのに対して益田地方は二毛作かきいて麦を多量に作付けたこともうかがわれる。

この外、桑つみ歌は山田白馬の収録中にもいくつかあるが、その中に次のようなものが見えるのは昔の鉄漿（かね）つけの習俗を伺うべきものとして面白い。

○ 十九孕女 白歯しゃなかる

いちご食わさりよ かねいらぬ

○ いかいお世話じゃ 地腹てござる

かねもいらぬか 子もいらぬ。

―（白馬一三頁）―

ここにいう「いちご」は桑の実で、黒紫色に熟したものは甘く、私なども子供の頃にはよろこんで食べた記憶があるが、口の中から唇まで紫色に染まるのである。「かねつけ」も私の祖母など結婚以来の慣習だとしてやっていたものであるが、母の時代に入るともう黒歯の人は見かけなくなつたから、あるいは飛驒も地域によってこの習俗の存廃には遅速があつたにちかいない。元来鉄漿をつける風習は、この語か「とりかへばや物語」や「源平盛衰記」「狂言記」等に見えることから推して、鎌倉時代以来の遺風であり、かつその頃には男もこれをつけることかあつたことかわかるか、飛驒では女子か十六七才の娘ざかりともなると、強制的にこれをさせられた所もあるように、

○ つけてくやしや 十六かねを

つけていちこの 思いする （白馬）

という歌が伝えられている。ここの「いちご」は「一期」で、何か「むすめ」時代との訣別をさひしかつたものと推測されるか、地域によってはまた縁談かまとまると同時に「おはぐる祝い」とか「かね祝い」と称する儀式めいたものか行なわれたといい、乗鞍山麓の旗鉾村では、親戚（伯母など）から「おはくる箱」の贈物を受けたことや、その箱には「おちよく」「おはけ」「くちゆすぎ」「はんそ」「かなつぽ」「へに」「ふしのこ」の七品が入っていたことなどか伝えられている。（山田白馬参照）因に久々野町の八月半に行なわれる地藏まつり（「せんと」「千灯」）のはやし歌に

お茶えい お茶えい むかえの山て蟬か鳴く

何と鳴く あねさの黒歯か気にかかる

というのがあるのも、このかね染めの風習を示すものだから、これを歌う今の子供達は恐らくその真意を知るものはなかるう。もっとも

最近はその歌詞に風紀上おもしろくないものがあるというので、替え歌を与えて旧歌をうたうことを禁じたというから、文字通りにこの習俗が忘れ去られる日も遠くないかと思われる。

(九) その他(食糧事情を察すべきものなど)

盆踊り歌などの中に、古い時代の食生活かどんなに貧しかったかを思わせられるようなものが多いので、若干を紹介して見たい。

○ 盆か来たとして 茄子雑炊しゃ

腹かひもじゅうて 踊られん

○ なすのこんた煮しゃ 一夜はもたんでんこ盛りすりゃ 鼻こける

てんこ盛りすりゃ 鼻こける

○ なすのこんた煮 流しこみやなるか 稗のまふししゃ 息つめた

稗のまふししゃ 息つめた

○ 「こんた煮」は「こった煮」。雑多なものを一しよに煮る意)

○ 茄子の皮よりゃ とんくりやよかる 腹にこたえる からからて

腹にこたえる からからて

○ あんねはだかか ちとお見せやれ これかはたかか まっくろて

これかはたかか まっくろて

○ はたかところか こきひを入れて 小きひわるわる 粥すする

小きひわるわる 粥すする

○ 河内米の飯 まつりか盆か 親の年忌か 正月か

親の年忌か 正月か

「河内」は益田川の上流、恐らく高山本線(なきさ)あたりの呼び名のように思われるかまた確かめ得ない。機を得て再調して見たいと思う。ともあれその待ちかねた盆にも米の飯はかりを十分に食べられなかったのてあろう。「はだか」は「はだか飯」、つまり白米飯を指すもので、戦後に「ぎんめし」などと呼んたことか思い合

わせられるのだから、「あんね(一般に若い娘や妻を呼ぶ語)——はだかか」と呼ひかけるあたり、米の飯を期待するさまか想われると共に一面何か意味ありけに興を引きたてているのもおもしろい。

なお以上の外に「栃くねり歌」として白馬の収録に見えるものかあって、今「栃の実せんべい」その他土産物品の名に見られる栃の実か重要な主食の一部を占めていたことなど推察されるか、また十分に考証し得ないので他日を期することにする。ただその中にある次の歌などまことに巧妙な俚謡というへきてあろう。

○ うれしはすかし まるこにされて

末はあんまの ままになる —(白馬四五頁)—

「栃くねり」というのは栃の実の皮を一粒一粒はく作業をいうように、「まるこにされて」はこれを意味するのであるし、「あんま」は前記「あんね」に対して若い男を呼ぶこととはあることかわかれは、この歌の意味は明らかになる。「まま」に飯をかけていることは言うまでもない。

## 結 び

以上で一先この稿を終ることにする。ここにとり上げて見たうたは必ずしも飛騨地方独自の風習をうたい上げたものと限らぬだろうこと「序」に述べた通りである上に、またこれの解釈も私の推測ちかいかあったり、憶測に流れたものもあるかも知れない反面、もっと風土色を豊かに見せているものも落していることもある。特に飛騨の政治史や伝説にもとづくと思われるものかたくさんあるのに、敢てそれに触れていないのは未だそれを報告するまでには私自ら考証し得ていないからで、そういう面のはすへて今後の機会にゆずりたいと考えている。大方の叱正教示をねかって止まない。

参考資料

- |                       |           |         |          |
|-----------------------|-----------|---------|----------|
| 飛驒のことば                | 土田吉左衛門    | 昭四、八、三  | 濃飛民俗の会   |
| 岐阜県益田郡誌               | 益田郡役所     | 大五、三、〇  |          |
| 岐阜県小坂町誌               | 小坂町誌編集委員会 | 昭四、三、〇  |          |
| 北飛驒の方言                | 荒垣秀雄      | 昭七、     |          |
| 飛驒の女たち                | 江馬三枝子     | 昭八、三、三〇 | 三国書房     |
| 飛驒の歌謡と民俗              | 山田白馬      | 昭五、二〇、一 | 飛驒考古民俗学会 |
| 其他                    |           |         |          |
| 雑誌「飛驒春秋」「ひだびと」        |           |         |          |
| 辞書「大日本国語辞典」「辞苑」「大言海」等 |           |         |          |